

善導『観念法門』の位置づけ

成瀬 隆純

一

浄土宗の三祖良忠が先師の口伝として『法事讚私記』中に、善導の五部九巻の成立順序につき「上来試論三五部前後」と述べてより、この順位が是認され本書の撰述は第三番目に位置づけられてきた。そのため最初の成立とされた『観経疏』と本書の間に生じる教理上の矛盾については、「衆機誘引」「徒仮入真」というごとき無理な会通をもつて対応しなければならなかつた。

近年にいたり自由な立場からの善導教学の研究が盛んとなり、著作順位の想定も種々試みられてきた。最近では良忠説は逆転され、『観経疏』をもつて善導最後の著作とみなす学説が有力視されるにいたつた。そこでこれら先史の研究を参考に『観念法門』中の問題点につき、別の視点からの考察を試みたい。

二

本書を客観的にみると二つの問題点に注目すべきことがわかる。まず第一点は、本書は隋・唐時代の諸経録が欠本と判定した、いわば天下の孤経ともいべき一巻本『般舟三昧経』を長文にわたつて引用していること。第二点として、道綽・善導と同時代の浄土教家、弘法寺釈迦才の『淨土論』と念仏行者の実践法が酷似しているという二点である。

はじめに一巻本『般舟三昧経』について考察を加えることとしたいた。

本経は現在の『大正新修大藏經』に三巻本と前後して採録されて、いかにも古来より浄土教研究者に依用されてきたのではないかとの認識がもたれている。しかし『法經錄』『大周錄』『靜泰錄』『開元錄』といった隋・唐代の諸経録は、いずれも本經を欠本と認定してその存在を否定しているのである。また中国本土で開版された現存のいずれの大藏經にも入

藏されることはなかつた。では『大正藏』はどのような経緯からこの経を採録する事が可能であつたのであらうか。それは『大正藏』が底本とした『高麗版大藏經』に本經が入藏されいていたことに起因するのである。そこでこの一巻本『般舟三昧經』と『高麗藏』との関係につき追求することとする。良忠の『觀念法門私記』には一巻本の伝來に関して次のとき貴重な記録を残している。

此一巻經既欠本也。然仁和寺二品親王長治二年五月月中旬、從太宰^三差^二專使^一、被^レ請^レ釈論疏鈔於高麗。高麗義天和尚疏鈔送進之時、同獻^一卷般舟經。

この記事から本經は長治二年（一一〇五）に仁和寺二品親王観行によつて、わが國へ将来されたことが知られる。しかも、幸いなことにこれとまつたく符合する記事が名古屋真福寺に秘藏される、契丹僧志福撰の『釈摩訶衍論通玄鈔』巻四に付された識語にあることを発見することができるのである。

寿昌五年般藏高麗國大興王寺奉^レ宣雕造^正二位行權中納言兼太宰師藤原朝臣季仲、依仁和寺禪定二品親王^仰、遣^レ使高麗國^請來、即長治二年五月月中旬、從^{太宰}差^三專使^二奉^レ請^一。

これによると『通玄鈔』の雕造は寿昌五年（一一〇九九）であり、有名な義天の『高麗統藏經』の開版に際し入藏されたことが知られる。いま問題とする一巻本『般舟三昧經』がこの『通玄鈔』と同時に、わが國へ献上されたということは、

本經も義天が諸國へ未伝の經典論書を探索した折に、いざこよりか将来されて稀覩本として開版され、わざわざわが國へもたらされたと想像することができる。しかし守其が撰した『高麗國新雕大藏校正別錄』には、その間の事情はまつたく記載されていないので『高麗藏』への入藏がいつ行われたのか確定することができない。一巻本の入藏を明記する現行の大藏目録が高宗代の新雕本の目録であることから推測するならば、義天の『統藏經』開版からこの新雕本の雕造にいたるおよそ百五十年間ほどの期間が想定されるのである。

それではどのような経路をへて本經は朝鮮半島へもたらされたのであらうか。隋・唐代の經録に欠本と認定され、宋代以降中国本土で出版されたいずれの大藏經にも入藏されなかつた事実から判断するならば、この一巻本『般舟三昧經』は經録編纂者の日の届かない広い中國大陸のある限られた地域に秘かに伝えられていたと想定しなければならないであろう。ところでここに、昭和八年山西省趙城県の広勝寺で発見された『金刻大藏經』の存在が注目される。本藏經については発見後、蔣唯心氏が現地を訪れて『高麗藏』との綿密な考証を行つて『広勝寺大藏經簡目』を残している。おそらくこの調査に信頼をおかけたであろう小野玄妙博士は、『仏書解説大辭典』別巻の『仏典總論』中に「金版大藏經目録（私案）」を作成されて、一巻本『般舟三昧經』の項目を記入されてい

るのである。先述したとく、この一巻本は『釈摩訶衍論通玄鈔』と同時にわが国へ将来された事実を想起するならば、作者志福が遼僧であり、金はこの遼を征服して建国したといふ歴史的背景に目を向けるべきであろう。

遼・金という北方異民族が支配した地域は黃河流域の北側に広がる山西省を含む広大な領域であり、この範囲には文殊菩薩の靈場五台山もありまた玄中寺も立地していたのである。したがつて、長安・洛陽といった当時の仏教の中心地からは距離を隔てていても、仏教とは因縁浅からぬ土地といふことができるのであって、この地に一巻本が行なわれていたとしても何ら不思議ではないのである。このことを念頭におき、いま玄中寺を中心に称名念佛思想の普及に努めた道綽の『安樂集』への引用にあたつて道綽は三巻本の行品からの經文を基本に引きながら、称名念佛に重要な思想的根柢を与える語句として、一巻本のみに存在する『當念我名』を連想させる「當念我名」という一句をあえて追加挿入している事実に注目させられる。「當」と「常」とは写誤とも推測され、道綽が一巻本を依用した可能性大といふことができる。この事実とさきに考察した『金刻大藏經』の検討結果と合わせ考えるとき、山西省のかぎられた地域には一巻本『般舟三昧經』の存在が予想できるのである。以上の考証から、本經を長文にわたつて引用する『觀念法門』の成立地も自ずから

限定されてくると思われる。

三

つぎに『觀念法門』に関する第二の問題点の考察に移ることとする。本書には具体的念佛三昧の実修法として「入道場念佛三昧法」が説かれているが、これは迦才『淨土論』中の中下の機根者を対象とした念佛実修の法と酷似しているということが指摘できる。

淨土論

觀念法門

三者須_三專念_一阿彌陀佛名號。須_三別莊嚴_一道場、燒香散花幡燈具足。請_三阿彌陀佛安_三道場内、像面

欲_レ入_三昧道場_一時、一依_三佛教_一方法、先須_三料理道場、安_三置尊像_一香湯掃灑_一。若無_三佛

堂_一有_三淨房_一亦得_三掃灑_一。如_レ法取_三佛像_一西壁安置_一。行者

等從_三月一日_一至_三八日_一（中略）行者等自量_三家業輕重、於此時中_一入_三淨行道、若一日乃至_三七日_一。（中略）於_三道場中、

書夜束_一心相續專心念_三阿彌陀佛_一、心與_レ聲相續唯坐唯立、七日之間不_レ得_三睡眠_一。亦不_レ須_三依_レ時禮佛誦_三經、數珠亦

除_三大小便利及_三食時_一、除_三大小便利及_三食時_一、
一_レ心專_レ念_三閟_一立念、不_レ須_三禮拜旋_レ遷_一、但唯念_三佛_一七日滿。出_三道場_一後、行住坐

不_レ須_レ捉、但知_三合掌_一。

小明_三淨_一經或_三十日_一等經_三明王_一經_三淨_一平

咸省_三睡眠_一除_三去_レ散亂_一。唯

『観念法門』中には「量家業輕重」「酒肉五辛誓發手不捉口不喫」という表現があることによつて、ここでの対象者が在家の信者であることがわかる。したがつて中下根の人たちと、いうことであり、両書は対象者も同じく、実践内容も同じであつて、文章表現が少しく異なるだけという事実が確認されるのである。また『観念法門』には右に引用した前後に『淨土論』があげる、懺悔・發菩提心・觀察・廻向等の必要性も説かれて、両書には多くの共通点が見出せる。

『淨土論』には、いまみた中下根の対象者の前に上根の人（出家者）についても、念佛と五念門の実修を内容とした実践法が説かれているが、『観念法門』ではどのような扱い方をしているのであらうか。

本書では冒頭に「依観經明觀仏三昧法」と標示して、以下に具体的に座法を説き、引き続いて阿弥陀仏の相好を順観・逆観十六遍くり返すべきとして細部にわたる説明を加え、最後に「住心向眉間白毫極須捉心令正。更不得雜亂即失定心難成」とこの法が『觀經』の十三觀による定心三昧であることを明言して結んでいる。引き続き文を改めて、持戒・念佛・誦經・礼讚の実修にあたつては大いに精進なることを勧めて、これに耐えうるならば上品上生間違いなしと断言している。すでに「定心」とい、いま「持戒・上品上生」ということは、この觀仏三昧の実修の対象者は出家者で

あつて、上根人であることを意味していると理解される。すなわちこの觀仏三昧法を全体として捉えれば『淨土論』中に迦才が上根人の実践法として明示した、念佛と五念門を修すべしとの方法論と内容的に一致し、両者ともに出家者（上根人）を対象とした実修法であると読みとることができるのである。このような両書の共通性は偶然に一致したものではなく、おそらく両者に共通する根本資料の存在が予想されうるのである。

『淨土論』の序文には、著者迦才自身が道綽の『安樂集』を人びとに紹介するにあたり、「使覽之者宛如掌中耳」と述べて、かれが道綽淨土教のすべてを本書で解説する決意を表明している。この文意から本書中に示された念佛実践法は、迦才の創意工夫によるものではなく、玄中寺を中心とした道綽が行つて来た行儀作法を整理して『淨土論』中に祖述したものと理解されるのである。他方、一巻本『般舟三昧經』の流傳地域の考証から、本經が隋・唐代に存在したのは、後に遼・金によつて支配された山西省内に止まるものと判断され、本經をもつて念佛三昧法を説明している『観念法門』の成立地も、この地域内に限定するのがもつとも合理的な判定と思われる。

四

『続高僧伝』卷二十玄中寺道綽伝を参考するならば、記事中に「綽般舟方等歳序常弘」とあり、また卷二十四曇選伝によると、道綽は太原義興寺において寺主智滿とともに「方等経」によつて、方等懺法を修して、いたことを伝えてい。これららの記事から推測するならば、すでに道綽自身が玄中寺を中心として『般舟三昧経』による念仏三昧の実修と、『方等陀羅尼経』による方等懺法を実行して、いたことが知られる。また『安樂集』中には、しばしば『観仏三昧経』が引用され、観仏三昧についての説明が行わされている。これらの事実を総合して考慮するならば、『観念法門』中に説かれる観仏・念仏・三昧法が、すでに玄中寺において寺主道綽の念仏布教に採用されていたと判断しても矛盾が生じないことになるであろう。

ところで本書に説く「入道場念仏三昧法」と天台智顕の『摩訶止觀』にみえる常行三昧、半行半坐三昧に着目して、善導と智顕との関連性が指摘されている。³⁾しかし、一巻本『般舟三昧経』流傳地域の制約から本書の成立地を山西省とするならば、當時善導は道綽の弟子として修業中であり、本書のごとき具体的実践法を創案するような立場ではなかつたと考えられるのである。

すでに考察したごとく『続高僧伝』中に智顕と道綽との密接な関係が指摘され、また本書と迦才『淨土論』中の念仏実践法の共通性に着眼するならば、本書の原形は玄中寺の道綽によって組織立てられた、『唐書』芸文志にいう『行図』一巻であつた可能性が考えられる。善導は玄中寺を去るにあたり、道綽淨土教の実践法を長安へ広めるために同書の要点を写しとり、念仏の功德を証明するための経証を抜粋編集した五種増上縁義一巻を合冊して、その後の長安布教に活用したものと想像される。したがつて、本書は韶州大梵寺における六祖慧能の教説を弟子法海が集記した『六祖壇経』を彷彿させるものがあり、尾題に付せられた「経」の一字も本書の権威づけの意味が込められていると推測される。以上の考証から本書は唐代初期における淨土教徒の実態を活写した、貴重な書物と位置づけることができるのではないかろうか。

1 神尾式春『契丹仏教文化史考』一二九頁
2 蒋唯心『金藏雕印始末考』現代仏教学術叢刊一〇・一二五頁。
3 藤原幸章『善導淨土教の研究』六一頁『同書』一三七頁。

〈キーワード〉 観念法門、善導、道綽、般舟三昧経
(早稲田大学講師)